２０１４．１２．１

燦々便り2

テニスの競技では相手を多く走らせ、自分は最短距離でボールに近づく。それにはどうすればいいか？と誰もが考え、努力してきたことですね。

それには追いかけないで、向かっていくようにすればいいと前に書きましたが、そのためには、一瞬でも早くボールのコースを読むこと！　ですね。

ボールのコースを読むにはボールから目を離さないで、相手のラケットの面をしっかりと見て、方向や打ち方を見て距離感等も見定めるようにします。

これが当たり前というか、皆さんも教わってきたことではないでしょうか？

ところがです。つい最近の全米オープンで錦織圭選手が活躍したのは記憶に新しいですね。

その活躍のなかで彼がいかにすごいかをテレビで解説してくれた中で、準決勝の時のことですが、錦織選手は相手（ジョコビッチ）が打つまえにスタートしている。というのです。

私たちはそのようなことをすれば、逆をつかれるから、相手が打つまでスタートしてはいけない。と習ってきませんでしたか？

これを見て、私はジョコビッチ選手になぜ相手の動く方向に打ったのか聞きたくなりました。なぜなら、錦織選手が天才ならジョコビッチ選手も天才です。わからないはずはありません。

私などには到底計り知れないことですが、私なりに想像してみました。

錦織選手はあの時、相手のコースも読めたし、先回りしても大丈夫だという予見があったのだと思うのです。それは経験によるものだけではないと思います。天才と言われる所の１つでしょう。

ただ、負け惜しみを言えば、こんなすごいことは精神的にも肉体的にも研ぎ澄まされた状態の中でしかできないのではないかと思います。　なぜなら次の決勝では疲れからか少し、精細を欠いたように見えましたから。　皆さんはこのことをどのように捉えられたでしょうか？

私は”人間の能力とは限界がないのだろうか？”と思ってしまいました

皆さんは錦織選手くらい練習をすれば誰でもできるよ。と思われましたか？

技術の習得

１を聞いて１０を知る！

教わるのではなく、技術は盗め！

よく言われていた言葉ですね。

これは教える側の論理です。これまで、これが正しいのだと思ってきましたから、（確かに正しい）だから私たち？は本当に教えるのが下手！

昔から言い伝えられたことは伝えて行かねばなりません。そしてそこにとどまらないで越えていかねばなりません。京都という町が歴史を伝承しながら発展してきたのは新しいものを恒に取り入れてきたからだと聞いたことがあります。

一言ですぐに理解する人。コツコツと努力して身につける人。十人十色です。

教える側はその一言を見つけるのが役目です。

教わる側もそれを期待してはいけない。

どんな技術も一方的では習得できないのですね。

盗むにしろ、教わるにしろ相手がいます。

なんとなく長い間生きてきて、一人では何もできないのだとつくづく感じています。

これまで私はテニスの楽しさばかり追求する大会を企画してきました。

初めて選手権なる名目の試合を企画できました。

できるなんて考えもしなかったことです。

どれだけ練習してもできないこと。

試合でしか得られないもの。

その場を企画できる。

教えるとか教わるを越えて、学ぶ場です。

楽しいを越えて喜びの場を目指しています。

次回びわこ選手権予定　　’15.３月以降